

中国研修及びヨーロッパ研修 －平成 22 年度学生海外研修報告－

八田 章光

(受領日：2011 年 5 月 25 日)

高知工科大学 国際交流センター長
(システム工学群 電子・光系)

〒 782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185

E-mail:hatta.akimitsu@kochi-tech.ac.jp

要約：高知工科大学国際交流センターでは、平成 22 年度は大学院生の中国研修、及び学部生のヨーロッパ研修の 2 回の学生海外研修を実施した。中国研修は本学大学院生と近い研究分野のハルビン工業大学の学生との研究交流、及び黒龍江大学学生との交流会を中心としたプログラムにより、大学院生の研究に対する強い意欲と研究に必要な英語力を身につけることへの高いモチベーションが得られ、充実した研修となった。ヨーロッパ研修では、ドイツで世界最先端の自動車工場や次世代薄型テレビの研究所を見学、英国ウェールズのグラモーガン大学では外国人学生向けの英語導入教育を体験受講し、また歴史あるオックスフォード大学の見学も行った。

1. はじめに

高知工科大学では博士課程の SSP(Special Scholarship Program)により多くの留学生を受け入れている。一方で、本学から海外へ留学する例はまだ少なく、日本人学生の目を海外へ向けるためには工夫が必要である。国際交流センター（IRC）では海外の大学や文化に関心を持つきっかけとして、短期間の海外研修を実施してきた。平成 22 年度より、前任の島教授のあとを受けて国際交流センター長を務めることとなり、今年度は 2 つ学生海外研修を企画、実施、引率した立場から感想を交えて報告する。

本学では「学業・人物ともに優秀な有望学生に対し、海外の大学との専門領域の交流、学生生活についての交流・意見交換を通じて、将来の国際的活躍への動機付けと国際感覚・知識・見識の醸成を図り、同時に研究・教育の両面で大学間国際連携の基礎を形成・強化すること」を目的に、学生の海外研修を実施している。主な研修内容としては、(1) 工学・経営学などの専門領域の研究室訪問と交流・懇談、(2) 相互の大学教員による相手大学学生向け授業、(3) 大学間の学生交流、(4) 大学間の交流・連携強化、などを掲げている。

国際交流センターによる学生海外研修は 2006 年度より始まり、2009 年度(平成 21 年度)は本学が公立大学法人に移行したことから、国際交流を一層活性化する目玉としてヨーロッパ研修が実施された。9 月中旬から 2 週間にわたり英国ウェールズのスウォンジー大学訪問やケンブリッジ大学の見学、スペインのパレンシア工科大学への訪問を中心とした研修プログラムに、大学院生 7 名を含む 15 名の学生、引率教員 5 名、職員 5 名の総勢 25 名が参加した。ヨーロッパ研修の実施により、従来のアジアを中心とする国際交流から、対象地域が大きく広がった。しかし研修の時期がヨーロッパの夏期休暇中と重なったため、ヨーロッパの学生との間で交流を促進する機会は必ずしも十分ではなかった。

2010 年度(平成 22 年度)は研修目的をより明確にし、研修プログラムの内容を目的にあわせて工夫すること、また参加者層と研修先、時期を適切に選定することに注力し、英語力の向上を主目的とする学部生のヨーロッパ研修と、専門分野の研究や勉強について交流する大学院生の中国研修の 2 つの研修を実施した。

2. 中国研修

2.1 中国研修の概要

中国研修はハルビン市のハルビン工業大学と黒龍江大学へ9月5日～10日の約1週間で実施した。対象は大学院修士課程学生とし、各研究分野で将来の活躍が期待される大学院生を募るため、学業・人物ともに優秀な者、研究能力の優れた者、及び英語力を有する者（自分の研究について英語によるプレゼンができること）を条件に、各コースより候補者の推薦を受け、書類（成績、TOEIC成績、研究業績）を参考に国際交流センターで決定した。各コース1名計8名程度を想定したが、複数名の候補者が挙がったコースと候補者のないコースもあり、調整の上10名の学生を選考した。物質・環境システム工学コース3名、知能機械システム工学コース2名、電子・光システム工学コース3名、情報システム工学コース1名、フロンティア工学コース1名で、いずれも修士課程で1年生と2年生が5名ずつとなった。

中国は急速な経済成長とともに科学技術でも著しい進歩が注目されており、その勢いは今のところ衰える様子がない。国際会議や国際交流、SSPの面接試験などで毎年のように中国を訪問してきたが、その都度、街や社会の様子が急速に変わっていくことに驚かされる。電気電子製品や自動車など先進的な工業製品については世界の工場であると同時に最大級のマーケットでもある中国には、欧米から多くの留学生が押し寄せているにもかかわらず、日本人留学生は極めて少ない（黒龍江大学）。本研修の目的は非常にレベルの高い中国の一流大学の大学院生と交流することで、研究分野で刺激を与え、ますます研究への意欲を高めること、及び、中国の成長の勢いを実感させることである。

中国の大学について211工程と985工程という言葉がよくでてくる。211工程は1995年に定められ、中国が21世紀に向けて100の大学を選定して重点的に投資するもので、それ以前は「国家重点大学」と呼ばれていた。985工程は1998年5月に中国教育部が定めたもので、中国の大学の研究レベルを国際的に通用するレベルまで高めるため、一部の大学に限定した重点的投資を行うというもので、2007年現在で39校が指定されている。いずれも中国政府は上位大学に重点的な投資をすることで大学の研究レベル、教育レベルを引き上げ、国際競争力をつけていくことを明確にしてい



ハルビン工業大学新キャンパス



黒龍江大学

る。

ハルビン工業大学は211工程及び985工程に選ばれた中国でのトップクラスの理工系大学である。2010年6月16日、佐久間学長がハルビン工業大学を訪問し本学との間で学術交流協定を締結した。旧知であった周副学長と今後積極的な学術交流を深める約束を交わし、学生海外研修についても国際交流部の全面的な協力が得られることとなり、今回の研修先として選定することとなった。

黒龍江大学はロシア語を中心とした外国語の研究教育で傑出した大学で、歴史的にも多くの政治家や文化人を排出している。SSP第1期生で現在本学ナノテクノロジー研究所の李朝陽准教授の所属大学でもあり、第2回の学生海外研修の研修先となるなど実際的な交流が深かったが、2010年6月17日に佐久間学長が訪問した際、あらためて国際交流協定を締結した。今回の研修ではハルビン滞在中は黒龍江大学の留学生ドミトリー／ホテルに宿泊した。また現地での移動に必要な貸切バスや見学ツアーも黒龍江大学に手配を依頼した。

研修参加者にはあらかじめ中国の歴史や現状、黒龍江省、ハルビン市、訪問先の大学等について

分担して調査し勉強会を行った。また研修で最も重点を置いたのはハルビン工業大学学生との研究発表交流であったため、何度も発表練習を行ない、なんとか形だけは整えた。さらに、交流会で披露するために一部中国語での Flying Fish や英語でのよさこいの説明を練習したが、準備が十分とは行かないまま本番を迎えた。

2.2 ハルビン工業大学の見学

ハルビン工業大学では2日間の研修プログラムを実施した。1日目(9月6日(月))は周副学長から歓迎の挨拶を受けた後、大学歴史博物館を見学した。ハルビン工業大学の旧学舎であり、建物自身が歴史的建造物である。また、歴史的に日本との関係が非常に深いことがわかり、親近感を覚えた。宇宙開発にかかわる最先端の展示や、大学出身者で中国政府要人の紹介などを見学し、ハルビン工業大学の技術、研究レベルの高さを実感した。

高知工科大学はまだ歴史を語るほどではないかも知れないが、来客に対して大学の歴史や特徴を見せる手段を確立しておくこと、及び10年毎くらいには歴史をまとめていくことが必要ではない



ハルビン工業大学でのレセプション



ハルビン工大歴史博物館の見学



ハルビン工大ロボット研究所の見学

かと感じた。本学の最初の10年を振り返り、対外的に見せるスペースを今後確保したい。また国際交流では様々な記念品をやりとりするが、ハルビン工大では大学歴史博物館に収められ、展示されている。本学では適切なスペースがなく教職員が個人で保管するしかない。何時、何処からどのような経緯でいただいた記念品か、わかるように展示しておかないと、次に来訪された際に落胆させてしまうことが心配される。

歴史博物館に続いてロボット研究所、ナノテクノロジーセンター、セラミックス研究所を見学した。ハルビン工大ロボット研究所は工場の自動化などに直接かかわった研究開発を行っており、産業界の技術拠点としての役割を担っていることが伺える。ナノテクノロジー研究所では電子顕微鏡など最先端の研究機器が次々と導入され、研究環境は日本と変わらないか、場合によっては恵まれているかも知れない。今後、SSPによって中国から優秀な博士課程学生を集めることの難しさを感じた。

2.3 ハルビン工業大学学生との交流

中国研修におけるもっとも重要なプログラムが2日目に行った学生による研究交流発表会である。本学から参加した大学院生の研究分野や発表テーマをあらかじめハルビン工業大学の国際交流部に送り、近い分野の学生を集めてもらって、研究発表交流会を実施した。交流発表会は自己アピールやコミュニケーションをむしろ苦手とする日本人学生の性格にも配慮された、素晴らしいプログラムであった。

はじめに日本人学生1人に対して、1人ないしは2人の中国人学生がパートナーとして紹介され、隣同士で着席する。パートナーはハルビン工



ハルビン工大パートナーとの研究交流

大国際交流部が選んで参加要請した学生で、日本人学生の研究テーマと同じ分野の学生、極めて近い研究テーマをもった学生である。このパートナーのアレンジが本プログラム成功の鍵であったと同時に、実施するうえで困難な点でもある。

本学からあらかじめ送った参加者リスト、所属、研究分野と発表タイトルに基づいて、国際交流部が精力的にパートナーを探して、交流会への参加を依頼してくれた。ある分野については直前までパートナーを見つけられず、前日になって依



ハルビン工大におけるプレゼンテーション



ハルビン工大研究交流を終えて記念写真

頼を受け、前の晩に慌てて準備したという学生もいた。それにしてもよくまとまった、内容のしっかりした上手なプレゼンテーションであり、ハルビン工大生の研究、英語力のレベルの高さを実感した。また、平日であるにも関わらず多くの学生が授業の時間割りを調整してまで参加してくれた。国際交流部(事務)から各指導教員に非常に熱意を持って依頼して頂いた結果と想像される。

交流会は学会形式で、司会も学生が務め、双方の学生が交互に、同じ分野の学生が続くように10分間のプレゼンテーションを行った。各発表終了後に全体での質疑応答は行わず、発表内容についてパートナーと5分間ディスカッションする時間を与えた。この形式が本プログラム成功の一つの鍵であった。

全体での質疑時間をとったとしても、英語力にも研究説明力にも必ずしも自信がない日本人学生が、挙手して質問することは非常に困難で、研修参加者の自信を喪失させる結果になったとも想像される。会話の相手をパートナーに絞り、また筆談なども交えて隣同士でコミュニケーションさせるという形式が功を奏した。はじめは遠慮したり、困惑しながらも、最後は皆パートナーとの親密な交流が実現できていた。後日、黒龍江大学での学生交流プログラムでも同様の手法が用いられた。今後の国際交流プログラムでは是非とも有効活用したい手法である。

2.4 黒龍江大学の見学

研修の3日目は黒龍江大学で軍事教練を見学した。中国の大学では9月に新入生を迎えるとすべての新入生を対象に2週間から3週間の軍事教練が行なわれている。軍事教練といっても兵器や武器の扱いを修得するのではなく、早朝から夕方暗くなるまで整列、行進を繰り返し規律を学ぶ内容



黒龍江大学で餃子づくり体験



黒龍江大学で軍事教練の見学

である。非常に厳しい教官として人民軍が大学の教育に協力するということである。中国の多くの大学は人民軍と連携して研究開発を行っており、教育と軍事の独立性という考え方はあまりない。大学生の教育に人民軍の教官が関わること自体、日本では是非が問われることであろうが、経緯はさておき、現在は新生の生活規律を保つために不可欠のプログラムになっているという（黒龍江大学）。

中国の大学はほぼ全寮制であり、基本的にはキャンパス内のドミトリーで生活する。一人部屋はほとんどなく、複数で部屋を共有する、ある意味では集団生活となる。ところが一人っ子政策の影響もあり、甘やかされて育った学生が多くなってきたために、ドミトリー生活や一人暮らしに適応することが容易でない場合も多くなっている。軍事教練中は朝7時の教練開始にあわせて起床、部屋の片付け等を強制され、見回って注意される。昼間は厳しい教官によって終日整列や行進を繰り返すという訓練があり、朝食抜きはあり得ない。衣食住の生活規律がしっかり保たれるようにした上で大学での勉強がスタートする。本学で



金上京歴史博物館の見学

行っている新生の宿泊オリエンテーションと目的として共通の部分もある。

今回の見学は軍事教練の最終仕上げ段階の日程であり、グラウンドで行進の閲覧式を見学したが、2週間から3週間にわたって毎日訓練しただけに、極めて整然とした力強い行進の姿に圧倒された。以前に、軍事教練のはじめのころを見学した際には、厳しさのあまり泣いている女子学生の姿もあった。また昨今では厳しい軍事教練に対して保護者からのクレームも増えてきているという。

軍事教練見学の後、中国食文化を代表する餃子作りを体験、試食し、近郊の金上京歴史博物館を見学した。また研修4日目には黒龍江省の歴史と文化について体験授業を受け、図書館や体育館等、大学の施設見学キャンパスツアーを行った。学生と同じ食堂で同じように昼食を食べた後、ハルビン市内の歴史的建造物を見学した。

2.5 黒龍江大学学生との交流

研修3日目の夜は黒龍江大学の学生との交流会を開催した。交流会は大学の国際交流部(事務局)ではなく、依頼を受けた国際交流の学生サークルが企画、開催したもので、英語の堪能な学生、一部は日本語のできる学生を集めた素晴らしいプログラムであった。黒龍江大学は外国語教育に優れており、多くの留学生を受け入れ、国際交流が活発であり、交流の体制も充実している。

学生交流会は博物館見学後、郊外の地元の朝鮮民族料理店で夕食を済ませた後、予定より遅れて夜8:30ごろから始まった。はじめに日本人学生に対してパートナーが紹介され、隣り合って着席した。最初に自己紹介というところで、自己ではなく、パートナーを紹介するというプログラムであった。まずパートナーと会話して、パートナーの名前や趣味を聞き出し、互にパートナーを皆に



黒龍江大学学生交流会を終えて記念写真

紹介するという趣向であった。ハルビン工大の研究発表の交流でもパートナーとの会話をうまくもり立てて交流を促進したが、ここでも同じ手法で会話を弾ませることができた。パートナー紹介の後、イス取りゲームやイス取りで負けた学生の罰ゲームとして歌や踊りを楽しんだが、学生の会話の様子を観ると、ハルビン工大での研究交流の方が、むしろ会話のネタがあって話しがしやすかったように感じた。研究テーマを離れて日頃の生活や趣味の話をしようとする、むしろ必要な単語がわからず困っているように思われた。

交流会を開催してもらったお礼に中国語を交えて学生歌フライングフィッシュを披露しようと、あらかじめ相談し、少しは練習して行ったものの、練習不足であり伝わらなかった。もっと練習しておけば良かったということだが、もとより本学学生がこのような国際交流の機会に慣れないことがその課題ともいえる。本学学生が国際交流の場で物おじせず、コミュニケーションができるよう様々な経験の機会を提供していく必要があると感じた。

2.6 中国研修の総括

参加した大学院生はさすがに各コースで推薦していただいた学生だけに、皆非常にしっかりしており、全行程を通して一人も1度も遅刻することがなく、また参加学生同士お互いに相談して行動し、引率者が心配することはほとんどなかった。参加者全員が目的意識を持って研修に取り組み、それぞれが自分の関係する研究分野で中国の大学の研究について刺激を受け、研究へのモチベーションをさらに高めることができた。また、研究においても、日常会話においても中国の学生に比べて英語力の弱さを強く実感した様子であり、参加者の感想文は皆、今後は英語の勉強に力を入れたいと記していた。このように中国研修は当初の目的を果す実りの多い研修であった。この中国研修の成功を今後の研修を企画する上での参考としたい。

参加者の多くは英語による研究成果発表の経験はなかった。大学院では国際会議など英語による研究成果発表の機会はずっと多くて良いと思うが、現状での学生の英語力が不足しているためか、実際はほとんど経験していない。各指導教員が積極的に学生を国際会議等に参加させるべく、大学が支援する体制や仕組みが必要と思われる。

3. ヨーロッパ研修

3.1 ヨーロッパ研修の概要

ヨーロッパ研修は2011年3月5日(土)から15日(火)の10日間の日程で、ドイツのシュツットガルト大学と英国ウェールズのグラモーガン大学、カーディフ大学、およびオックスフォード大学を訪問した。対象は学部学生に限定し、また英語の学習意欲を高めることを目的として、TOEIC500点程度以上という応募資格を課すこととした。参加希望者本人からの申込書、成績証明書と小論文、および面接試験により国際交流センターで参加者を選定した結果、1年生4名、2年生3名、3年生1名、4年生2名の合計10名が参加することとなった。

1年次の学生が参加する上でTOEICの受験機会を複数回確保すること(7月と11月)および前年度のヨーロッパ研修で訪問先の夏休みに重なって、学生との交流が困難であったこと等を考慮した結果、実施時期は年度末となった。

ヨーロッパで訪問先を選定することは困難な作業であった。交流協定を結んでいるバレンシア工科大学は昨年度訪問しており、続けて研修訪問することは先方にとって負担が大きい。今回は平成22年度より国際交流センターの委員に加わって頂いたナノデバイス研究所(現ナノテクノロジー研究所)の李朝陽准教授、および同研究所の古田守教授が、電子ディスプレイの研究開発で以前より交流のあるシュツットガルト大学のフルハーフ(Norbert Fruehauf)教授に研修訪問の受入れを依頼することとした。シュツットガルトはドイツ屈指の先進的な工業地域であり、大学のハイレベルな研究所と最先端の自動車工場の見学を中心とした研修プログラムを行った。

フルハーフ教授は学生、ポスドクを合せると約80人のスタッフを抱えるディスプレイ技術研究所の所長であり、ヨーロッパにおけるディスプレイ研究のキーパーソンである。本学ナノデバイス研究所(現ナノテクノロジー研究所)で行っているディスプレイ関連材料の研究開発に関心を持ち、本学に來学したこともあり、古田教授、李准教授と情報交換をしながら共同研究の可能性を模索している。今回の研修では研究所の見学に古田教授、李准教授も参加し、研修の合間に今後の共同研究の可能性についても議論する機会を得ることができた。

英語の学習意欲を高めるという意味では英国

への訪問は欠かすことができないと考え、英国の訪問先を模索した。昨年度はウェールズの関係者の紹介を得てスウォンジー大学を訪問し、学生交流も実現して一定の成果が得られた。今年も同じ大学でのプログラムを続けることが容易であるが、やはり先方の負担を考えると避けるべきと判断し、他の大学を検討することにした。ウェールズ地域は多くの日本企業が工場進出した歴史もあり、日本とのつながりが深く、研修先としては適している。今年度はウェールズで最大の街であるカーディフに滞在し、カーディフから程近いグラモガン大学を訪問することとした。

ドイツのシュツットガルト、英国のウェールズに滞在した後、ロンドンに移動しオックスフォード大学の見学とロンドン市内の博物館等の自由見学を行った。学生研修の企画立案と手配では研修目的に鑑みて、すべてのプログラムを詳細に検討し、必要な予約などを逐一手配する必要があるという点で受入先の関係者と IRC の負担が非常に大きい。例えばオックスフォード大学の見学は、旅行会社に依頼すればツアーを手配してもらうことはできるが、一通りの観光ツアーになってしまい、研修旅行としては満足のいく提案は得られない。今回のオックスフォード大学見学では、これも李准教授らと研究で関係の深い国立台湾大学の劉如熹 (Ru-Shi Liu) 教授から、教え子がオックスフォード大学に留学しているとの紹介を受け、現地の学生から情報を提供してもらって、大学内部の見学ツアーや学生食堂での食事を手配することができた。

3.2 シュツットガルト大学と自動車工場

成田空港に前泊し、フランクフルト行きのルフトハンザ便で3月6日(日)夕方ドイツに到着、ここで現地に先に入っていた大内准教授と合流し、国鉄に乗り換えてシュツットガルトに向かった。フランクフルトからシュツットガルトへはルフトハンザの乗継ぎ便として扱われる列車で、飛行機の搭乗券で乗車する。夜7時ころシュツットガルト駅に到着、地下鉄とトラムを利用してシュツットガルト大学の経営する学生向けホテルに移動した。ホテルはトラムの駅から3分程度の便利な場所であり、貸切バスなどは手配せず、一般の公共交通で移動した。現地の社会インフラを見学、体験するチャンスでもあり、できるだけ公共交通で移動するプランをフルハーフ先生にお願いし、交通機関のないメルセデスベンツ工場の見学会以外

はすべて公共交通を利用した。

シュツットガルトでの研修第1日目(3月7日(月))は大学の研究所を3か所見学した。はじめにフルハーフ先生のディスプレイ技術研究所を見学、実用レベルの液晶パネルを試作できる装置群に驚いた。日本の大学でこれだけのまとまった設備を持つ研究室は大手のメーカーだけであろう。ディスプレイパネルの試作から新材料や新プロセスの開発までを、80人の学生とスタッフで運営するには多額の予算獲得も必要であり、装置メーカー等と多くの共同研究を行い、ヨーロッパにおけるディスプレイ技術の開発拠点の一つとなっている。

ディスプレイ研究所に続いて午後からは学内の火力発電所を運用する燃焼炎発電研究所と機械工学系の研究所を見学した。燃焼炎発電研究所は15万kWの実用火力発電プラントを運用しながら、燃焼炎の効率改善について研究している。日本で電力会社の運転する大型火力発電所が1基で約100万kWであることを考えると、大学内で15万kWの発電プラントは非常に大きなものである。1世帯で1kWとしても15万世帯を賄える出力であるが、大学内には大きな需要を抱える研究所が数多くあり、ほとんど大学内のみで消費される。

シュツットガルトの研修2日目はメルセデスベンツの工場を見学した。一般向けの見学は行っておらず、この研修プランも旅行会社を通じて手配することはできないものであった。フルハーフ先生がメルセデスの知人を通じて特別に依頼した見学であるが、実はメルセデスベンツユーザー向けには同じ見学ツアーを行っている。そこにはエンジン付き自動車を発明したメルセデスならではの歴史があった。かつて、自動車のオーナーは同時



ディスプレイ研究所の見学



Kimono のプレゼンとゆかたの披露

に自分自身が修理やメンテナンスを行うエンジニアでなければならなかった。街に自動車会社や修理工場は存在しなかったからである。メルセデスで自動車を購入するということは、工場で一定期間の研修を受け、運転のみならず修理やメンテナンスの講習を受講した後に、キーを受け取るという仕組みがあった。今もこの名残で、一部のユーザーは街のディーラーを通じないで直接メルセデスから自動車を購入し、車の引き渡し時には製造工場を見学した上で、工場でキーを渡され新車に乗って帰るというコースが用意されており、毎日多くの購入者が訪れている。中には日本人の来客もあり、購入した新車でヨーロッパをドライブ旅行した後に、輸出手続きをして帰るそうである。

1日目大学の研究所を見学した後は、ディスプレイ技術研究所の学生との交流会を催した。日本人学生のうち4人が、日本の文化や生活、卒業研究などについてパワーポイントで紹介し、その後、バーベキューを楽しみながら交流した。ドイツの学生はもちろん英語も流暢であるのに対し、



卒研の電子回路試作について発表

研修初日の日本人学生はなかなか言いたいことを表現できずに困ることが多かった。ドイツの学生が積極的に話しかけて盛り上げてくれたおかげで日本人学生も打ち解けた気分を味わうことができた。2日目、工場見学の後はカーニバルを見学した後、学生だけのグループに別れて市内を見学した。ここでもディスプレイ研究所の学生が親切に案内をしてくれたことで、日本人学生は英語による交流の達成感を味わうことができたと思われる。ドイツ人学生がいるところでは、日本人同士が日本語で会話することを厳に慎むようアドバイスしたものの、どの程度実践できたかは心もとない。

見学では学生のトイレのタイミングの悪さが気になった。団体行動に慣れていないためと思われるが、見学中に移動を中断してトイレに行くため、他を待たせてしまうことが多くあった。生理的な現象は仕方がないが、およそのスケジュールはあらかじめ行程表として渡しているがあまり目を通していないのかも知れない。時間に余裕のある時にトイレを済ませて、団体行動を途中で止めてしまうことが無いようにと、シュツットガルト大学初日の見学を終えて注意を与えた。

ドイツを発つ日は地下鉄のストライキが予定されているというニュースもあり心配したが、やや待ち時間が長かったものの地下鉄も運行され空港まで公共交通で無事に到着した。初日、駅への到着から最終日シュツットガルト空港を出発するまで、研究でも非常に多忙なフルハーフ先生がほぼ3日間付ききりで案内をいただいた。見学先のアレンジや公共交通による移動の手配もすばらしく、また非常に親切で気のつく優秀な学生が日本人学生をサポートしてくれたことが学生にとって達成感のある研修につながったと感じる。

3.3 ウェールズのグラモーガン大学等訪問

シュツットガルトからアムステルダム経由でウェールズの中心都市であるカーディフに到着した。カーディフでの主要なプログラムは3月10日(木)の1日だけで、グラモーガン大学とカーディフ大学を訪問した。カーディフ駅から車で25分のトレフォレスト駅の近くにグラモーガン大学がある。グラモーガン大学では外国人留学生向けの英語の授業を体験した後、学生によるプレゼンテーションを行った。出発前に時間をかけて準備したプレゼンテーションのいよいよ本番の日、緊張の場面である。

グラモーガン大学の英語の授業は極めて有意義であった。英語の苦手な学生に対して、授業を担当していただいた、ヘレン先生とエミリー先生、2人の英語教員の教育スキルと教材が素晴らしい。非常に乏しい語彙力でも、うまく言葉を引き出し、会話に持っていくことで、学生が安心して英語を発することができるようになっていった。安心して、あるいは自信をもって話す雰囲気を創ることがまず重要であるということがわかった。

続いて行った学生のプレゼンテーションには、グラモーガン大学の学生が20名ほど参加し、小さな教室はいっぱいになった。出発前の練習でも課題が残ったままのプレゼンテーションであり、学生の緊張が心配されたが、その前の英語のレッスンが効果的の気持ちをリラックスさせたようで、日本での練習よりもずっとうまく話すことができた。質疑応答でも、ヘレン、エミリーの両先生がうまく話を切り出して、答えやすく聞いてくれたことで発表した学生は自信を深めることができた。苦労して準備した英語でのプレゼンター



ヘレン先生とのディスカッション



エミリー先生とのディスカッション



Kanji のプレゼンと習字の披露

ションはまずは成功であった。

Kimono の紹介をプレゼンして持参したゆかたを披露し試着を体験させたこと、日本の食文化を紹介してインスタント味噌汁を振る舞ったこと、Kanji を紹介し、筆ペンを持参して習字を体験してもらったこと等、日本文化の紹介は大変に盛り上がり、荷物を増やしてまで苦労した準備が大いに報われた。

今回の経験ではグラモーガン大学に短期間滞在して英語によるコミュニケーションの基礎教育を受けることが日本人学生にとって非常に有意義であり、英語の実力向上と学生間の交流が期待できると感じた。グラモーガン大学側も受け入れ態勢があると聞いたので、早速 2011 年度に計画したいと考えている。プレゼンテーションの後、キャンパス内の見学と学生食堂でランチを食べて、さらに工学系の英語の体験授業を受講した。例えば自転車の絵を渡されて、これをみていないパートナーに "bicycle" とはいわずに英語で特長、形状を説明し、描かせるというゲームなど、面白い趣向であった。

夕方カーディフ市内に戻り、カーディフ大学ビジネススクール日本研究センターのセミナーに参加した。日本のゴルフ文化を紹介するセミナーは分かりやすい英語で面白い講義であった。同ビジネススクールには日本人の教員や留学生も多く、その夜はカーディフ大学の教員、学生とともに市内に繰り出して交流を深めた。朝から夜遅くまで充実した研修の1日となった。

翌日3月11日(金)はカーディフからロンドンへ鉄道で移動する行程で、昼頃カーディフを出発する汽車を予定していた。朝、ホテルでテレビのニュースで視たのは東日本大震災の、津波によっ



カーディフ駅でのインタビュー



地元インターネット TV でオンエア

て人や街が流されていく凄惨な映像であった。英国でもニュースはこの映像を繰り返し流し続けた。インターネットのニュースでも極めて甚大な被害が出ているという情報が入ったため、知人の安否を電話で確認するとともに、帰国のフライトや成田から羽田への交通状況についての運行状況確認を依頼した。

カーディフ駅で列車を待っている間に、地元のインターネットテレビ局のクルーが学生への取材を申し込んできた。もちろん、震災についてどう思うか、心配ではないかという趣旨のインタビューであった。代表して2人の学生がしっかりと英語で受け答え、当日夜のインターネットニュースで英国内に配信された。

この後、日本から時々刻々と伝えられる深刻なニュースの映像にますます心配を深めながら、また帰路の確保についても心配しながら旅行を続けることとなった。

3.4 ロンドンおよびオックスフォード大学

3月12日(土) ロンドンから1日かけてオックスフォードを訪問した。はじめは Information を通じて申し込んだ公式のガイドツアーに参加し、その後は St. Anne's college の博士課程学生 Hungchun Lai さんがツアーをアレンジ、終日にわたり案内をしてもらった。

現地の学生が案内してくれるのは非常に心強くまた、観光ガイドツアーとは異なり研究者や学生の視点で街と大学を眺めることができた。学期末の土曜日で見学や食堂の体験利用ができないカレッジが多い中、可能な選択肢を見いだして充実した見学を行うことができたのも現地学生に依るところが大きい。最終日3月13日(日)はグループに別れて学生のみで主に大英博物館を中心とした見学を行った。



オックスフォード大学の見学

3.5 ヨーロッパ研修の総括

研修実施に先立って、オリエンテーションを企画し、参加者でテーマを分担してドイツや英国の文化等について調査し、発表会を行って勉強した。また日本の文化や大学生の生活を紹介するテーマを選定し、プレゼンテーションを準備して練習を繰り返した。卒業研究に取り組んできた4年生以外は、聴衆を前にしたプレゼンテーションの経験がほとんどなく、聞き手の興味の湧く話題を選定し、わかりやすく話すことは非常に難しく苦労した。最後の練習会でようやく形がまとまってきたものの、練習不足は否めない状態で出発を迎えた。

研修でのプレゼンテーションの機会は2回あり、はじめはシュツットガルト大ディスプレイ技

術研究所での交流会で、4人が発表を行った。発表者は非常に緊張していたがフルハーフ先生をはじめ研究所のメンバーが温かく盛り上げてくれたおかげで発表者は達成感が得られたようである。

次はグラモーガン大学で全員が発表を行ったが、このときはヘレン先生らによる英語の体験授業で、英語を話すことの緊張感や苦手意識をうまく和らげてくれた直後であり、思いの外スムーズに、思ったことを表現することができ、日本での練習とは見違えるほどの素晴らしい出来栄であった。英語力向上という意味で成果のある研修となった。

一方、団体行動やコミュニケーションという点で課題が残った。団体行動の経験が少ないためか、オリエンテーションも含めてほぼ毎回のように集合時間に遅れる学生があり、それも同じ学生がいつも遅れるというのではなく、誰かが遅れてくるということが繰り返された。団体行動で集合時間を守ることの重要性があまり認識されていない。あらかじめ渡した旅程表にあまり目を通しておらず、スケジュールを把握していない。ツアーガイドたる引率教員にひたすら従って行けば良いという、受身的な参加態度が感じられた。

4. まとめ

平成22年度は中国とヨーロッパ2つの学生海外研修を実施した。中国での研究交流は充実したプログラムで参加した大学院生にとって有意義な研修であった。ドイツでの見学はやや専門的でレベルが高く、学部の低学年には、英語である上に、技術的内容が難しすぎた部分もある。グラモーガン大学での英語研修内容は参加者に適切なレベル設定であり、英語力の向上の機会として有意義であった。

謝辞

学生海外研修の実施にあたっては国際交流センターのメンバーやSSP卒業生をはじめ学内外からの多くの協力を頂き無事安全に、また有意義に終えることができた。特に受入先の大学等関係者には大変なご協力を頂いた。すべての関係者に深く感謝したい。中国研修の報告に使用した写真はすべて事務局前田氏より提供して頂いた。

Reports on Student Study Tours to China and to Europe in 2010

Akimitsu Hatta

(Received : May 25th, 2011)

Chair, International Relationship Center, Kochi University of Technology

(School of Systems Engineering)

185 Miyanokuchi, Tosayamada-cho, Kami, Kochi 782-8502

E-mail:hatta.akimitsu@kochi-tech.ac.jp

Abstract: Two study tours of graduated students to China and of undergraduate students to Europe were carried out in 2010 fiscal year by international relationship center of Kochi University of Technology. The study tour to China was a fruitful training for the graduated students of KUT to encourage their eagerness for research and to motivate their study of English required for their research, due to the well organized program consisting of research symposium with students in the relating field of Harbin Institute of Technology, and friendship meeting with students of Heilongjiang University. In the study tour to Europe, excursions to the automobile factory of world highest technology and to the institute of next generation flat display were executed in Germany. The participated students also experienced an introductory English class for foreign students in Glamorgan University in Wales, and an excursion to the historical university in Oxford.